

山月記（前半部）

なかしま あつし
中島 敦

内容理解

この文章の前半で、作者は、友人である袁修への告白として、主人公李徴にその数奇な人生を語らせ、一人の詩人に起きた悲劇を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

闇の中へ駆け出した李徴

・進士に登第するも、「性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く」、賤吏に甘んじていることができず、詩人として¹ に名を残そうと官を退く。

・文名は揚がらず² は苦しくなり、詩業に絶望、妻子のために³ を屈して、再び地方官吏の職を奉ずる。

・かつて⁴ と侮った同輩の下命を受けることとなり、「狂悖の性はいよいよ抑え難く」、公用の旅先で発狂、行先知れずとなる。

← 残月の光を頼りに出発した袁修

・監察御史を任ずる袁修は、早朝に商賈を出立、人食い虎に襲われる。

・虎は身を翻し、叢^{くさむら}に身を隠した。叢から漏れた声に、袁修は旧友李徴と思い当たる。

← 虎になった李徴と友袁修との会話

・袁修の問い「その声は、わが友、李徴子ではないか？」

← 李徴の答え「いかにも自分は隴西の李徴である。」

（同年に進士に登第、⁵ な袁修は、友人の少ない李徴の、最も親しい友であった。）

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

俗悪（二〇・四）

往年（二〇・一二）

無我夢中（二三・八）

礎（二四・一二）

・袁傚の問い『なぜ叢から出てこないのか』

青年時代に親しかった者どうしの、隔てのない語調

李徴の答え…故人の前にあさましい姿をさらせない。

李徴の頼み〈1〉…わが⁶ 今の外形をいとわず、話を交わしてほしい。

・都のうわさ、旧友の⁷ 、袁傚の現在の地位、それに対する李徴の⁸ ……

李徴の告白 〈1〉（袁傚の問い…どうして今の身となるに至ったか。）

・一睡して目を覚まし、戸外で呼ぶ声を追って走り出すと、いつしか虎となっていた。

・なぜこんなことになったか、「分からぬ。全く何事もわれわれには分からぬ。」

・押しつけられたものを受け取り、理由も分からず生きていくのが、⁹ だ。

・死を思う、そのとき、目の前のうさぎを見て、自分の中の人間は姿を消す。

¹⁰ な行いの跡を見、運命を振り返るときが、最も情けなく、恐ろしく、憤らしい。

・人間に還る時間が次第に短くなり、やがて人間の心は消えてしまうだろう。

・人間の心が消え、しあわせになることが、恐ろしく、悲しく、切ない。

↓〈李徴の嘆き…「この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。」〉

（後半へ）

主題

作品のこの前半部分で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…虎になった李徴の心情の変化〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・中島敦の『李陵』について、登場人物の李陵や司馬遷はどのような人物か。さらに物語の時代背景はどのようなものだったか。

・唐代の試験制度（科挙）に関連する唐代の詩人のエピソードにはどのようなものがあるか。

100

山月記（後半部）

中島 敦

内容理解

この文章の後半で、作者は、告白の中に現れる主人公李徴の自嘲癖にふれ、虎に身を変えた運命に加え、一人の人間に起きる悲劇を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

← 李徴の頼み（２）

・自分の詩業のうち、記誦するもの数十を後代に伝えてほしい。

（袁修は、叢の中から朗々と響く声に従い、三十編の詩を書き取らせる。格調高雅、意趣
1 なるのには、どこか（非常に）2 を思いながら、漠然と、このままでは、第一流の作品
3 となるのには、どこか（非常に）4 な点において）欠けると感じた。）

李徴の自嘲癖（李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。）

・虎になった今でも、俺の詩が、長安風流人士に読まれることを夢見ている。

・嗤（わら）つてくれ。詩人になり損なつて虎になった哀れな男を。

・お笑い草ついでに、今の思いを即席の詩に述べてみよう。

← 残月のもと、人々は肅然として、この詩人の 4 を嘆じた。

← 李徴の告白（２）（袁修の問い…どうして今の身となるに至ったか。）

・詩によつて名を成そうと思ひながら、5 に就いたり、詩友と交わつて切磋琢磨（せつさくま）に努めたりしなかった。かといって、俗物の間に伍するを潔しとしなかった。ともに、臆病な自尊心と尊大な羞恥心のせいである。

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

鬼才（二七・15）

切磋琢磨（二八・2）

空費（二八・10）

暴露（二八・12）

・「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という性情こそが「⁶」であり、外形を内心にふさわしいものに変えてしまった。

・才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な⁷と、⁸をいとう怠惰とが自分の全てだった。虎になってこのことに気づき、胸を焼かれるような悔いを感じる。胸を焼く悲しみを誰かに訴えようと、空谷に向かつてほえても、皆、ひれ伏すだけ。

↓〈李徴の嘆き…「誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。」〉
別れに臨んでの李徴の頼み〈3〉

・妻子に俺は死んだと告げ、彼らが道途に飢凍することのないように計らってほしい。

・李徴の自嘲癖（李徴の声は先刻の⁹）
的な調子に戻って、言った。）

・飢え凍える妻子より、己の¹⁰を気にかけるような男だから、獣に身を落とした。

← 付け加えての李徴の頼み〈4〉

・帰途にこの道を通らないでほしい。（虎となった自分が故人を襲わないように）

・前方百歩の丘に上って振り返り、今の自分の姿を見てほしい。

（再び自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないために）

白く光を失った月を仰いで、虎は、二声三声咆哮した。^{ほうこう}

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…李徴の自嘲癖と嘆き〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・対句など、七言律詩の規則について調べ、あらためて李徴の即興の詩を味わってみよう。

・中国文化の中で虎がどのような存在であったか、また、虎にまつわる慣用句にどのようなものがあるか。

・変身物語として世界的に有名な、カフカの『変身』は、どのような物語か。

100